

本報告論文集について

本冊子は、2016年2月3日および4日に京都大学大学院文学研究科の主催、同アジア研究教育ユニット（KUASU）、人間・環境学研究科および地域研究統合情報センターの共催により京都大学稲盛財団記念会館で行われた、「東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ（2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ）」の報告論文集である。

2010年の夏に京都エラスムス計画により、中山大将、福谷彬ら6名が南京大学へ派遣され、2ヶ月間当地で中国語の学習と、巫覡（当時：南京大学外国語学部所属）を含む南京大学社会学院の院生との共同調査を行った。その成果は、『京都エラスムス計画 2010年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告—南京市・江蘇省南部の都市と農村—』にまとめられている。

2011年の夏には再度京都エラスムス計画により、中山大将、櫻田涼子2名が南京大学へ派遣され、1ヶ月間の中国語学習と南京大学社会学院院生との共同調査を行ったほか、「京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム」を行った。京都大学からは中山ら2名が報告を行い、南京大学から3名が報告を行い交流を行った。巫はこの際に通訳を担当した。この成果は、『京都エラスムス計画 2011年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告—京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集—』にまとめられている。

2012年は京都エラスムス計画による派遣はなかったものの、中山大将、櫻田涼子、平井芽阿里、福谷彬が計画を立て、2010年以来協力を得ている張玉林教授と提携し、再度ワークショップの開催を実現した。この成果も、『2012年度京都大学・南京大学社会学人類学若手研究者共同ワークショップ報告論文集』にまとめられている。

2013年および2014年には京都大学アジア研究教育ユニットや同文学研究科の支援を得て、南京大学の院生を招いて京大でのワークショップ開催を実現した。若手間の論評や民族学博物館の共同見学会などを図り密な研究交流を実現した、この成果は、『京都大学アジア研究教育ユニット 報告書 3 2013年度 京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集』および『京都大学アジア研究教育ユニット報告書 7 2014年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集』としてまとめられた。なお、これら5冊の報告論文集は、KUASUのHPおよび京都大学学術情報リポジトリ上でWeb公開されている。

本ワークショップの特色の一つは、基本的に日本語と中国語という双方にとっての母国語を使用言語としていることである。英語中心のアジア国際学術交流の場は近年多いが、本ワークショップでは、自分の母国語で考え、アジアの言語で分かち合うことを目指した。決して英語を排斥しようというわけではない。重要なことは、国際学術交流における「多様性」である。東アジア交流数千年の歴史を思い返し、その上にこのワークショップを接ぎ足したいのである。

今回は、南京大学だけではなく、国外からは上海交通大学、台湾大学、中央研究院の若手も招いた。参加者の専門分野も社会学、文化人類学だけではなく、哲学、文学、歴史学にわたり、一般来場者も含め参加者の国籍は5ヶ国にわたる学際的国際交流の場を実現できた。

京都エラスムス計画の南京派遣で参加者が感じた、分野やフィールド、そして国籍を越えた交流は、同計画が幕を閉じて、いまだなお熱を持ち続けている。ぜひ、本報告書に目を通し、東アジアの新しい世代の研究者間の交流の胎動の一端を知っていただければ幸いである。

福谷彬 巫覡 中山大将

2016年5月4日

关于报告书

本报告书为 2016 年 2 月 3 日至 4 日由京都大学大学院文学研究科主办，同大学亚洲研究教育机构（KUASU）、人间环境学研究科以及地域研究综合信息中心协办，于京都大学稻盛财团纪念会馆召开的“2015 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛”活动的报告论文集。

2010 年夏中山大将、福谷彬等 6 名日本年轻学者通过京都伊拉斯谟计划被派往南京大学，在进行了为期 2 个月的汉语学习后与包括巫靓（当时为南京大学外语系学生）在内的南京大学社会学院研究生进行了共同调查。其成果为《京都伊拉斯谟计划 2010 年度中国社会研究短期集中项目报告书：南京市暨苏南地区的城乡》。

2011 年夏中山大将和樱田凉子再次通过京都伊拉斯谟计划前往南京大学，除与上年一样进行了短期的汉语学习（1 个月）以及共同调查外，还与南京大学的研究生共同举行了“南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛”。京都大学方中山和樱田进行了报告，南京大学是由司开玲、周雷和王华 3 名同学进行发言，巫靓担任了现场翻译。论坛的成果最终编辑为《京都伊拉斯谟计划 2011 年度中国社会研究短期集中项目报告书：南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛》。

2012 年虽然京都伊拉斯谟计划没有派遣任何学生去中国交流，但在张玉林教授的帮助下，中山大将、樱田凉子、平井芽阿里、福谷彬再次实现了论坛的交流活动，并将成果收录为《2012 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛报告论文集》。

2013 年以及 2014 年在京都大学亚洲研究教育机构（KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT）的资助下，南京大学的研究生们来到日本，论坛实现了在日本的召开。除了论坛上的相互点评，中日的年轻学者还共同参观了日本民族学博物馆等，实现了丰富的学术交流。其成果为《京都大学亚洲研究教育机构 第三报告书 2013 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛报告论文集——由‘京都伊拉斯谟计划’应运而生的学术交流》以及《京都大学亚洲教育机构报告书 7 2014 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛报告论文集》以上 5 册的报告论文集均已在 KUASU 的主页以及京都大学学术信息知识库（Kyoto University Research Information Repository）上公开。

本论坛的特色之一是将日语和汉语，即对双方而言都是母国语的语言作为使用语言。近年亚洲国际学术交流活动多以英语为主要使用语言，而通过亚洲的语言进行交流的国际会议并不多见。本论坛的主旨是通过自己的母国语思考，利用亚洲的语言进行相互理解。当然这绝不是排斥英语，重要的是希望实现国际学术交流的“多样性”，以此继承东亚数千年的交流史。

今年的论坛我们不仅邀请了南京大学的学生，还邀请到了来自上海交通大学、台湾大学、中央研究院的年轻学者。参加者的专业也不局限于以往的社会学和文化人类学，还涵盖了哲学、文学和历史学。从参加者的国籍来看，包括当天现场聆听的普通听众，跨越了 5 个国家，实现了名副其实学术上的国际交流。

本论坛是由京都伊拉斯谟计划的南京派遣而生，但是在上述计划结束后，计划的参加者们所感受到的超越自己研究领域、调查地以及国籍的交流依旧持续着。希望通过本报告书，能让更多的人了解东亚新一代研究者们交流的最新动向。

福谷彬 巫靓 中山大将
2016 年 5 月 4 日